のskeletal ClassIIIを示したものと考えられた．今後は咬合管理を行い，成長終了後外科的矯正治療を適用する予定である．

26．2根管ならびに過剰歯根を有する犬歯の1例

○藤井　茂仁*,***，細川洋一郎**，金子　昌幸**，松嶋　宏篤***，矢嶋　俊彦***
(*医療法人ルミエール歯科，**北海道医療大学歯学部歯科放射線学講座，
***北海道医療大学歯学部口腔解剖学第一講座)

【目的】一般開業医において根管治療は日常的に行われており，歯の根管数および根数の確認は重要である．一般に，上顎第一大臼歯の近心頬側根，および下顎第一大臼歯の遠心根が高頻度で2根管性であることは広く認識されており，日常臨床において，見落とされることは少ない．しかし，2根管および過剰根を有する犬歯は，その認識が低いので，処置後，症状が軽快せず再度治療となる可能性も高いと考えられる．今回，2根管で2根を有する下顎右側犬歯の1症例を経験したので，文献的考察を加えて報告する．

【症例】58歳，女性．う蝕治療のためルミエール歯科を平成14年8月に受診した．下顎右側犬歯はCR充塡が施されていたが，口腔内からの概観に異常はみられなかった．この下顎右側犬歯に自発痛を生じたため，急性歯髄炎の診断のもと，浸潤麻酔下で，抜髄処置を行った．翌日，臨床症状が特に認められなかったため，ガッタパーチャーポイント＋エンドシーラーの側方加圧にて根管充塡を行い，X線写真を撮影した．X線診査の結果，根管充塡をした根の舌側に，さらに他の1根を確認した．再度，臨床的に根管を探索した結果，根充した根に比べ，唇舌的に圧平された，より小さい根管口が舌側に認められた．根管拡大後，追加の根管充塡処置を行い，X線撮影で確認を行った．その後，特に臨床症状を認めず，メタルコア装着後，前装鋳造冠の装着を行った．本症例は，現在特に不快症状の発現もなく，良好に経過している．

【考察】犬歯は歯根形態も単純で長く，変異も少ないと考えられている．しかし，過去の報告によると，2根性の犬歯は0.3%程度存在する．また，2根管性の犬歯は6－28%程度で報告がみられる．発生頻度は低いが，犬歯においても過剰根，2根管をもつ可能性を考慮にいれ，治療することが重要であると思われた．

27．12年間放置された上顎骨陳旧性骨折
―併発していた上顎洞炎が，骨折治療後に自然治癒した1例―

○飯沼　英人*,**，田中　力延**，佐野　友昭**，大西　　隆**，細川洋一郎**，金子　昌幸**
(*自衛隊札幌病院診療科歯科・**北海道医療大学歯学部歯科放射線学講座)

今回われわれは，骨折後自覚症状が認められずに12年間経過した，上顎洞炎を伴なう上顎骨陳旧性骨折の症例を経験したので，若干の考察を加えて報告する．

【症例】34歳，男性

【主訴】22および23相当根尖部から鼻翼にわたる腫脹と疼痛

【既往歴】1988年5月6日，相撲大会にて顔面を打撲し，耳鼻咽喉科にて鼻骨骨折の診断のもと，応急処置を受けるもその後放置．約数週間顔面の腫脹が認められたが，自然に消退した．

【現病歴】2001年6月以降，前歯部の腫脹と出血を伴なう激痛を自覚するも，近医歯科にて内服薬を処方され症状は消失．2001年11月，近医歯科にて，13の歯内療法中に22および23根尖部から鼻翼にかけて腫脹と疼痛が出現したため，11月19日，自衛隊札幌病院診療科歯科を受診．

【現症】14～24部にかけて手指にて歯牙を動揺させると，歯槽突起部から一部上顎骨を含めて一塊として動揺し，疼痛と13～23部歯肉溝からの排膿を認めた．CT検査にて，左側上顎洞内に炎症を疑わせる所見が認められた．

【処置ならびに経過】2001年12月10日，全身麻酔下にて，観血的整復固定術，上顎形成術，骨片間異物除去術，12・13・23抜歯術を施行．12月28日，軽快退院．その後2002